

「会員短信 71」

「虚子生誕百五十年」

木藤隆雄

ここ数年、愛媛県生涯学習センターで、現代教養講座を担当させていただいている。テーマは、その年によって変わるが、最近では、子規と漱石の俳句や文学について語ることが多い。内容が決まると一度喋ってみて、講義メモに目安となる時間を記入しておく。当日は、時々それを盗み見しながら講義を進める。ピタッと時間通りに終わらなければ、自己満足に浸ることができるのだ。

ところが去年は、講義が半分進んだところで、五分程早く進み過ぎていることに気が付いた。おかしいなと思いつつ何とかアドリブで補ったが、後で検証すると一つの項目を飛ばしてしまっていた。

その項目とは、子規の「先見の明」に関することだった。子規は、まず野球の面白さにいち早く気づいた。他にも、新聞紙上で日露戦争を予言したり、断られはしたものの虚子を後継者に選んだり、先を見通す力があるという展開にするはずだった。

この虚子の部分をすっかり抜かしていたのである。そこで今年は、この部分を膨らませて「虚子の特集」にしようと思っている。ちょうど今年は虚子生誕百五十年。タイムリーな講義になる。

子規の依頼を断った虚子だが、昭和二十九年、俳句界で初めて文化勲章を受章している。

われのみの菊日和とはゆめ思はじ

参りたる墓は黙して語らざる

虚子は、長い道のりを経て、結果的に子規の後継者になった。そして、俳句界に大きな足跡を残した。